

私のこころの物語 2

でんわ  
パパからの電話



作 すみ ゆかこ 絵 R・りんどう

だいすきな パパへ

エリより

私のこころの物語 2

# でんわ パパからの電話



作 すみ ゆかこ 絵 R・りんどう



にし そら  
西の空がなぜかバラ色のきれいな夕焼けに染まっています。

「いつもはオレンジ色なのに。今日はピンク！ あ～きれい。」エリは美しい空に、感動していました。

くも みずいろ ぐんじょう  
雲は水色から群青に、ところどころは金色に染まり、切れ間から一筋の光がスポットライトのように照らします。

「お空への道みたいだ。」エリは思いました。



リン リン <sup>でんわ</sup>電話のベルが鳴りました。エリは元気な声で出ます。

「はい、<sup>きたの</sup>北野です。」

「エリ！ エリ！」 <sup>でんわ</sup>電話のむこうから声<sup>こえ</sup>がひびいた。

いつものパパの声だ。

「あっパパ！ どうしたの？」

「声<sup>こえ</sup>が聞きたかったんだよ、エリ<sup>こえ</sup>の声<sup>きゆう</sup>が急に聞きたくなったんだ。」

<sup>でんわ</sup>電話のむこうのパパ<sup>こえ</sup>の声が、なぜかエコーがかかって聞<sup>き</sup>こえてくる。



——<sup>いなか</sup>田舎のおじいちゃんに<sup>でんわ</sup>電話をしたときに「今、お風呂に入っているんだよおー」あ<sup>こえ</sup>の声<sup>こえ</sup>みたい。

パパもホテルで<sup>ふろ</sup>お風呂に入っているのかもしれない。—— エリは思<sup>おも</sup>いをめぐらせました。

「パパ、早く帰ってきてよ。エリもお兄ちゃんもさびしいよ、ママは会社から帰るの遅いんだもの。もう、7時なのにさ、まだ帰ってこないんだ。」

「わかった、わかったよ。パパ早く帰るよ。おみやげも買ったからね。」

「うん、明日だよ。予定通りだよ。パパ！」 「……………」 返事がありません。

もう一度大きい声で「パパァ！」って呼んでみたけど、「ジージー ピーピー」と雑音が入って電話は切れてしまいました。

——どうしたのかな？ もっとお話したかったのに。——

と思いながら、「でもいいや、明日の夜にはパパ帰ってくるもの。」と、エリはつぶやいていました。

そして、パパの顔とおみやげのことを思い、楽しくなるのでした。



パパはいっ げつ いちど がいこく しゅっちょう一か月に一度は外国に出張します。

「今度はこんど どう かかん にじゅうはちにち かえ10日間だから28日には帰るよ。エリのバースデイには間に合うから、カナダでプレゼントを買ってくるよ。」パパはカレンダーにシルシをしました。



ママとお兄ちゃんにいと、猫ねこのマイと、玄関げんかんでお見送りみおくしました。ママはチュッと投げキッスをして「気をつけてね!」と言いました。

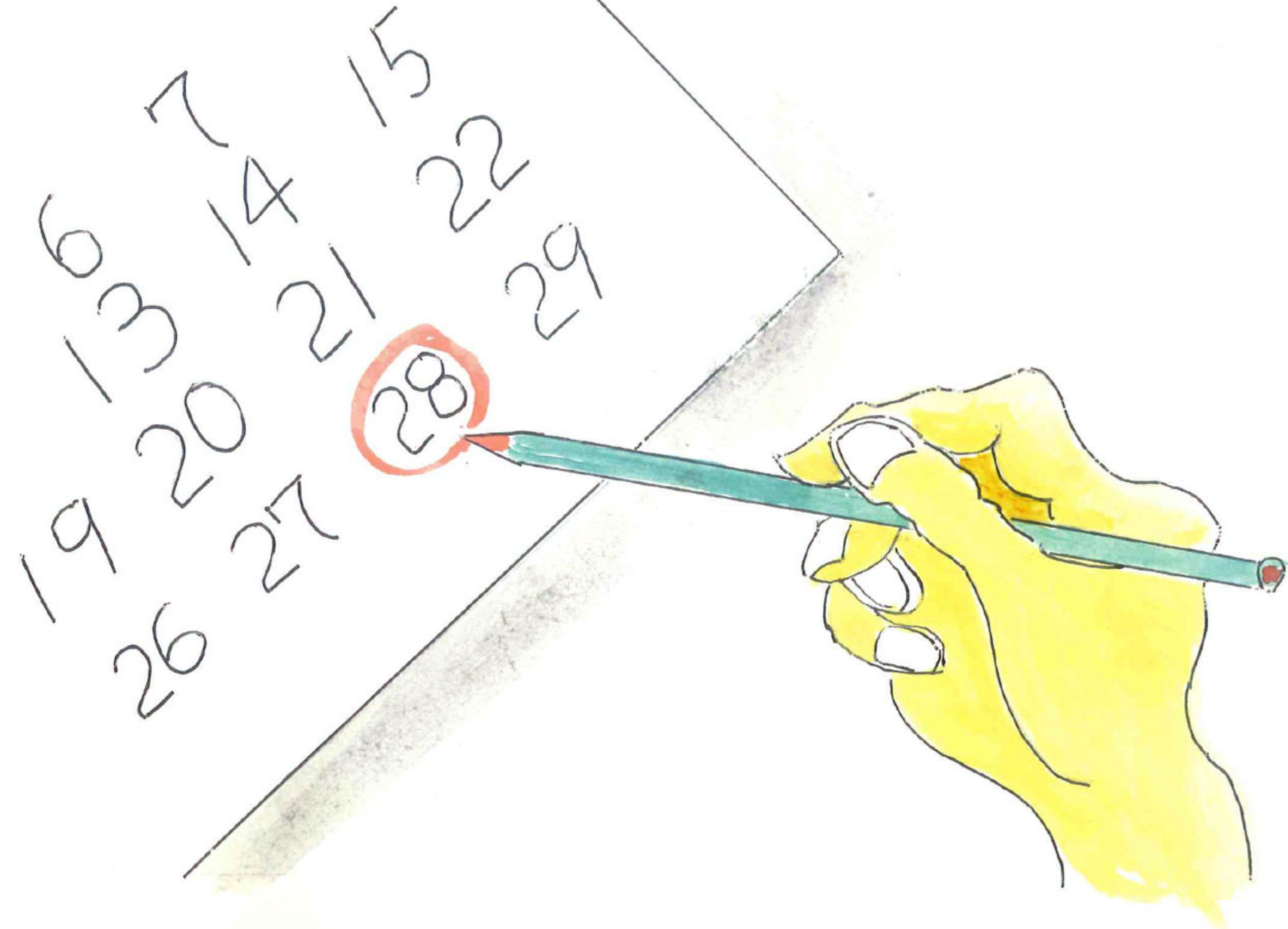
いつものお見送りみおくでした。

出張しゅっちょうは毎月まいつきのことなのに、パパっ子このエリはさびしいのです。

学校がっこうから帰ると机かえの上の家族写真つくえ うえ かぞくしゃしんを見ながら——パパ——と呼びかけるエリでした。

「お兄ちゃん、パパから電話でんわあったよ。すぐ切れちゃったけどさ。」

「あ〜 そう。」受験生じゅけんせいの樹兄いつきにいさんは、机つくえに向かったまま、そっけなく言いました。





やがてママが帰ってきました。「お帰りなさい！ ママ。」 エリは、猫のマイを横抱きにして玄関に大急ぎ。

するとママは玄関にボーっと立っていました。なぜか、顔は真っ白、くちびるがふるえています。

エリはさげびました。「ママ！ どうしたの！」 横抱きのマイを放り出していました。

「エリ、お兄ちゃんを呼んできて！ 早く呼んできて！」 声がふるえていました。目が真っ赤です。

エリは階段を大急ぎでかけ上がり、お兄ちゃんを呼んできました。



「二人とも、二人ともしっかり聞いてね、さっき、ママのスマホに電話が入ったの。パパがね、パパが、カナダで死んだの。車の事故で死んでしまったの。」

ママは泣きながら言いました。

「事故にあって、病院で亡くなってしまったんだって。パパがどこの人かわからなくて、ようやく日本人とわかって、会社がわかって、本社からママに連絡が入ったのよ……。」

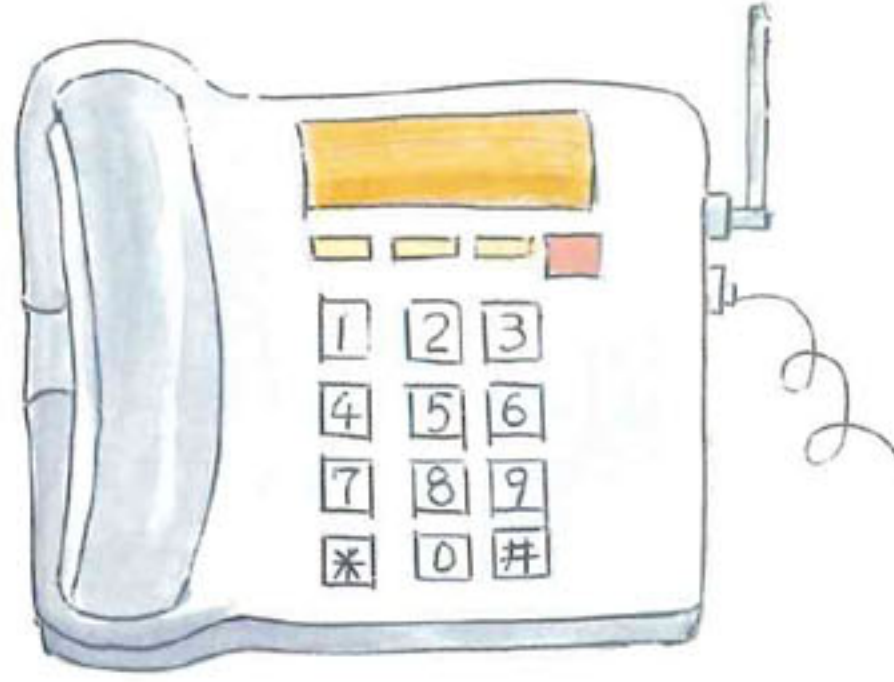


エリは思わずさげびました。「ママ！ そ、そんなのウソだ！ だ、だってエリ、  
パパの声さっき聞いたもの。エリの声、聞きたいって言ったんだよ。」 エリは  
早口であわてながら、ママに言いました。

「パパの会社の社長さんから電話があったのよ。コールドレインの中で玉突き  
事故だったんだって。」 ママはエリをさえぎるように、ブツブツと今までの  
ことを話しました。

ママの眼はうつろでした。

「明日、朝の飛行機でパパをお迎えに行くのよ。三人で行こうね。」 ママの  
しずんだ、さみしい声でした。



エリはもう一度さげびました。

「ママ、聞いてよ、聞いてよ。エリ、パパと電話でお話したんだよ。エリの声聞きたい、  
おみやげ買った、って言ってたよ。ちびまる子ちゃん見てからさ、パパの電話があつて、  
7時だけど、まだママ帰っていないって言ったんだもの。電話7時だったんだよ。パパ死ん  
でなんかいない！ うそだ！」 エリは必死でママに言いました。

ママは、マジ顔のエリの訴えにはじめて気がついたように言いました。

「エリ、それって本当？ 本当なの？」 「本当だよ、本当だよママ、お兄ちゃんにも言ったもん。」 樹は突然の出来事に、呆然としています。

キョトンとした顔で、「うん、聞いたような気がする。」と言いました。

「エリ、いつものようにソファでうたた寝して、夢を見たんじゃないの。パパはもう亡くなっていたんだもの、電話は出来ないもの。夢を見たんでしょ。」 ママは悲しい目で言いました。

そして、やっとコートをぬぎ、「これから会社の人たちや、田舎からもみんな来るからね。」と言いながら、リビングを片づけ始めました。


樹もだまったままママを手伝い、机の上の本を片づけたり、椅子を並べたりしていました。



どうしても信じられないエリはママの背中をたたきながら、大きい声でもう一度言いました。

「私、うたた寝なんかしていないよ。本当に、パパとお話したんだよ。ママ、本当の本当だよ。」エリは必死でした。

—あの声はパパの声だったもの、夢じゃない。本当にパパとお話したんだもの。—



「あっ！」思い出しました。—途中で電話が切れた。ジージーって切れた。あのとき、パパは死んだのかな。—

「わかったわ。エリの言うことは信じるわ。でもね、でもね、パパは死んでしまったのよ。」  
ママは、自分に言い聞かせるように、ゆっくりと言いました。

「きっと、パパは天国へ行く階段の途中で、エリの声がもう一度聞きたくて、電話したの  
かもしれないね。エリのこと大好きだったものね。バースデイのプレゼントもお約束して  
いたんだもの。エリとどうしてもお話したかったんだよね。」

ママはエリを強く強く抱きしめ、泣いていました。



エリはそのときようやく、おぼろげにパパの死を感じてい  
ました。

——パパ死んだの？ 本当なの？ でも、私、うたた寝して  
いないよ。夢じゃないよ。パパと話したんだもの。だったら、  
パパは私の声聞いてから、天国に行ったんだ。私の声聞きた  
かったんだね。—— パパア、パパア、とつぶやきながら、  
エリも泣いていました。



いっき ちゃくしんりれき しら 樹は着信履歴を調べていました。エリがあまり強く「パパと話した！」と  
い は 言い張るからでした。ママはうたた寝の夢と言うけど、妹のためにナンバー  
ディスプレイを み 見っていました。やはり、がいこく 外国からのちゃくしん 着信はありません……。

いっき じゆわき て お 樹はそっと受話器に手を置きました。

そして泣いているエリの かた 肩を抱いて、やさしく い 言いました。

「エリ、パパのこと しん 信じたくないけどさ、でも ほんとう 本当なんだよ。オレだって  
ぜったいしん 絶対信じたくない、けどもうパパは かえ 帰ってこないんだ。」

「エリ、わかるね。」

「うん、わかった。」 ちい 小さい こえ 声でエリは こた 答えました。





エリはじっと電話を見つめていました。——あの電話のむこうにはパパがいる。パパはまた、私に電話してくる。——小さいエリには、やっぱりパパの死は信じられないのです。

——「エリの声聞きたいよ。」きつときつと電話がくる。——

「エリ、お支度しなさいよ。明日のコートも用意するのよ。」ママから声がかかります。

白いコートポケットに、エリは紙に包んだお菓子をそっと入れました。ガラスのキャンディケースから石ごろもを3個包んでいたのです。「パパ、いしこもろ好きだから。」

樹兄さんは、そのようすを見ていました。

——エリは、パパのことわかっていない。エリにはやさしくしてあげよう。——



—電話のむこうに絶対パパはいる。誰も信じてくれないけど私のヒミツ。—

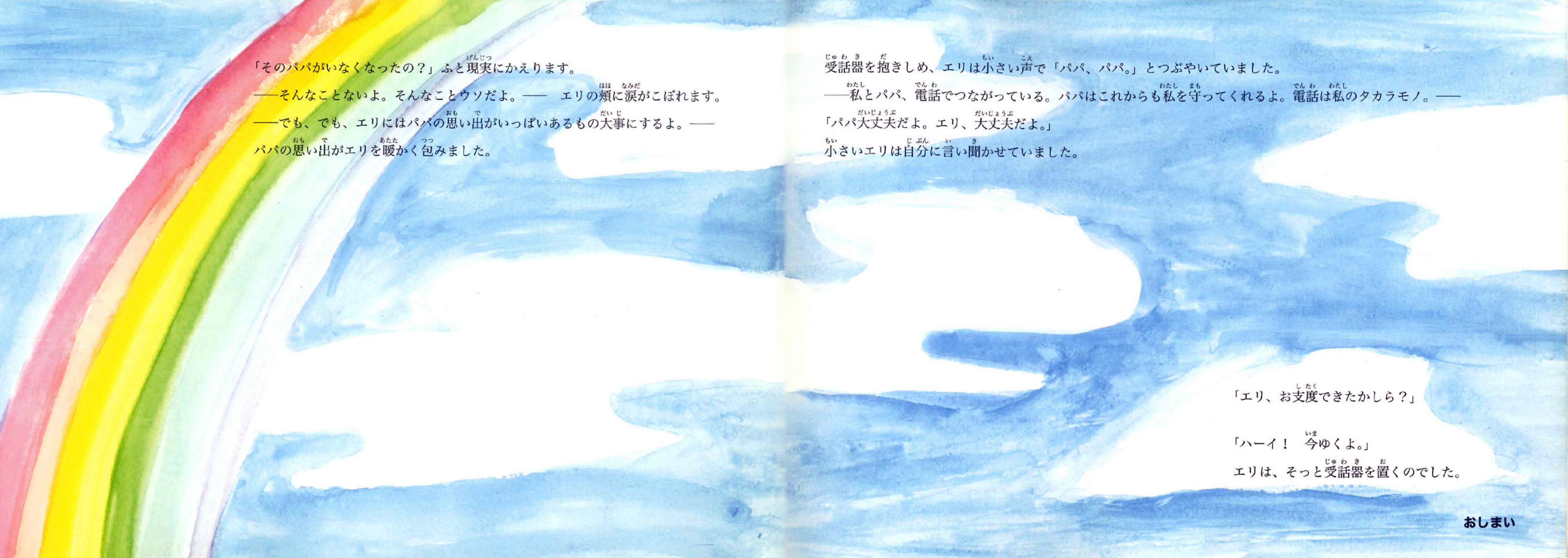
まっ黄色の菜の花畑がどこまでも続いていて、そこをパパと走ったっけ。

牧場に行ったときは、小さなお馬さんに乗ったよ。パパが引いてくれたんだ。

スキーのときは、パパの前に乗って滑った。長いゲレンテの下までずっとずっと。  
キャンプの朝は寒くてパパの大きなシェラフの中にもぐりこんだよね。暖かかった！

エリの頭の中をパパとの思い出が、ぐるぐると走馬灯のようにかけめぐります。  
どの思い出のスクリーンにも、エリを見守るパパのやさしい笑顔がありました。





「そのパパがいなくなったの？」ふと現実にかえります。

—そんなことないよ。そんなことウソだよ。— エリの頬に涙がこぼれます。

—でも、でも、エリにはパパの思い出がいっぱいあるもの大事にするよ。—

パパの思い出がエリを暖かく包みました。

受話器を抱きしめ、エリは小さい声で「パパ、パパ。」とつぶやいていました。

—私とパパ、電話でつながっている。パパはこれからも私を守ってくれるよ。電話は私のタカラモノ。—

「パパ大丈夫だよ。エリ、大丈夫だよ。」

小さいエリは自分に言い聞かせていました。

「エリ、お支度できたかしら？」

「ハイ！ 今ゆくよ。」

エリは、そっと受話器を置くのでした。



## おもいで

おもいで たいせつ わす おきな ひ  
思い出、大切な、忘れられない、幼い日の。

そしてひとときわあざやかな たくさんのおもいで。

かな わす おもいで け け おもいで  
悲しく忘れたい思い出、消しゴムで消してしまいたい思い出。

なみだ なが おもいで  
涙で流してしまいたい思い出。でも、それも「おもいで」。

エリちゃん パパの<sup>かずかず</sup>数々の思い出、決して<sup>わす</sup>忘れないよね。大切に<sup>たいせつ</sup>こころにしまってね。

じゆわき <sup>かぜ</sup>風にのって、エコーにのって、<sup>こえ き</sup>パパの声が聞こえたらいいね。

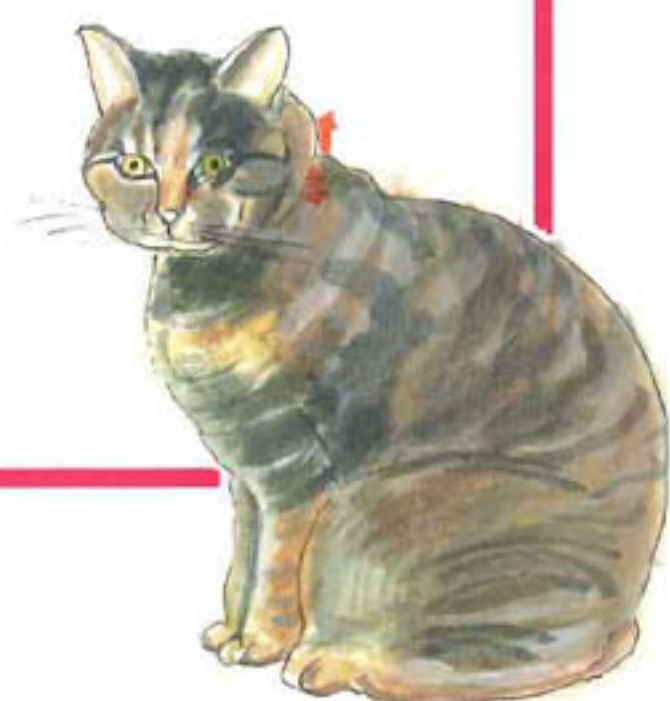
つきひ <sup>おとな</sup>月日がたって、大人になっても、<sup>こえ たいせつ おもいで わす</sup>パパの声、大切な思い出、忘れないでね。

パパは<sup>いろ そら</sup>バラ色の空のずっとむこうから、<sup>とき みまも</sup>どんな時もあなたを見守っているよ。

きっと きっとよ。

りんどう<sup>せんせい</sup>先生 ありがとうございます。

すみ ゆかこ





私のこころの物語 2

でんわ  
パパからの電話

■ 作：すみ ゆかこ

■ 絵：R・りんどう

■ 2016年7月15日 発行

■ 編集・制作・出版：那須 由莉 (らびす舎)

〒389-0115 長野県北佐久郡軽井沢町追分 1092

信濃追分駅舎内 編集室

Mail: lapiz@ia5.itkeeper.ne.jp

■ アートディレクション・デザイン：柳谷 廣之

定価：1,000円(税込み)